

タイトル	ベルクソンと三人の研究者たち：ピアジェ、ヴィゴツキー、そしてドゥルーズ
著者	佐藤，公治； Sato, Kimiharu
引用	北海学園大学経営論集，15(3)：21-48
発行日	2018-03-25

ベルクソンと三人の研究者たち

— ピアジェ、ヴィゴツキー、そしてドゥルーズ —

佐藤 公治（北海道大学名誉教授・北海道文教大学大学院教授）

はじめに

ベルクソンは近代哲学に大きな足跡を残した稀有な哲学者で、多くの研究者に刺激を与えてきた。彼は、1859年生まれで、1941年に81歳で死去しているので、時代の推移を考えると彼の研究はもはや古典に属するかもしれない。だが、今日でもなお彼の研究をめぐる議論は続いている。最近、日本でも彼の著作集が新訳で刊行され、文庫版も新しい訳で登場することが続いている。

ベルクソンは国際連盟の仕事や哲学研究の優れた業績で1927年にノーベル文学賞を受賞している。彼の著書は明快かつ美しい文章で書かれており、散文としての評価も高い。だが、彼の多くの著書は、そのユニークな主張展開とも相まって難解なものが多い。特に彼の代表作の一つである『物質と記憶』（1896）は、記憶を物質対象との直接的な経験による知覚との連続として考えていることや、人間精神の本質にあるものに迫っており、心理学の問題とも深く関係している。だが、心理学では本格的に取り上げて議論されることは少なかった。

近年になって、『物質と記憶』についても、ベルクソン哲学研究という枠を超えた学際的な議論が始まっている。それが平井他・編の『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』（2016）である。ここでは、ギブソン生態心理学との関わりであるとか、ブルーナーの認知心理学をベルクソンの知覚理論の問題として議論することが始まっている。さらに、ベルクソン研究の論点である心身問題、時間論、あるいは生命論についても、その問い直しが行われている。

この小著では、ベルクソンを詳細に論じるものではなく、あくまでも心理学者の視点からベルクソン研究の意味を考えてみようとするものである。ベルクソンが問題にしたことは心理学者が無視してはいけないものを含んでいる。ピアジェとヴィゴツキーという発達心理学を代表する二人がベルクソンに注目し、そして批判的な論を展開している。あるいは、ベルクソンの影響を強く受けながら、それを乗り越えようとした哲学者のドゥルーズも人間精神の生成に対するベルクソンの主張の重要性をもう一度見直し、新たな展開の道を探っている。このように、ここで取り上げる三人の研究者がベルクソンを論じていることを通して、人間精神の問題の核心にあるものを確認していくことができる。

1. 研究方法をめぐる議論

ここでは、ベルクソンが形而上学（哲学）の研究として、目指そうとしていたことをいくつか

の著書を概観しながら確認していく。その後、ベルクソンの研究方法について、ピアジェとヴィゴツキーが異論を唱えていたことをみていく。

(1) ベルクソンの形而上学研究とその基本姿勢

1) ベルクソンの実証的形而上学

ベルクソンの学問的姿勢を一つの言葉で表現すると、「実証的形而上学」の確立である。「実証的形而上学」という言葉は、ベルクソンが複数の教育機関で講義したものをまとめた『ベルクソン講義録Ⅰ』（1990）の「前置き」で、グイエが使ったものである。これは、自然科学と同じように科学的な形而上学として学問を確立していこうとするベルクソンの学問的目標を端的に表している。彼の研究姿勢は晩年の『思想と動くもの』（1934）の「緒論（第一部）」にもみることができる。ここで、彼は次の文章から始めている。「哲学に最も欠けていたものは正確さである。哲学諸体系はわれわれが生きている現実の寸法に合わせて裁断されてはいない。」（邦訳 p. 9）。哲学は抽象的な概念でもって説明し、それを拡張してしまうために、概念の正確さ、具体性が欠けてしまっているということである。生物学者が実験と観察による実証科学として行っているように、哲学者も科学者と同じように振舞う必要がある。もちろん、人間を扱う哲学は自然科学と同じようには研究できない。そこでは独自の研究のスタイルと方法が用いられなければならない。ここにベルクソンが解くべき課題があった。このようなベルクソンの問題意識は、ヴィゴツキーが科学的心理学の構築を目指そうとしたことと一部、重なるところがある。

『ベルクソン講義録Ⅰ』には「心理学講義」がある。ここで彼が展開していることを複数の著書の内容と関連づけてみると、心理的事象は二つの原理で解かなければならないという主張である。一つは、原理を事実によって確証していくという方向で、『意識に直接与えられたものについての試論』（1889）である。ここで論じられているのは、外的対象と直接関わるものと、その連続としての「知覚」、さらには意識があるということである。もう一つは、心理学には物的対象と直接、関わることも、また、生理的過程と同じ様に扱うこともできないということである。そこで、ベルクソンが人間の精神活動の中心に置いたのが「直観的省察」である。これが、難解さで知られる『物質と記憶』の内容である。この著書には、知覚と記憶の連関を扱う以外にも、もう一つの彼の重要なメッセージとして、失語症に関するもの（第二章・「イメージの再認について」）がある。ベルクソンは当時までの大脳生理学の知見、あるいは失語症に関する理論を詳細に検討したうえで、言語に関わる記憶は脳に局在的に蓄積されてはいないと結論する。彼は感覚性失語や運動性失語をウエルニッケ領野、そしてブローカ領野という脳の局在における単なる記憶の欠損ではなく、言語活動は複数の領野における連関による機能的な活動であるとする。

失語という言葉で私たちがイメージとして持つものは、言葉を司る脳の特定の局在における記憶が損傷し、言葉の機能を失っているというものだが、彼はそうではなくて、言葉を形にするその適切な方法を失っていることによるのだとする。語を操る機能の障害が失語症だと結論した。ここに、ベルクソンが人間の意識は生理学という自然科学的手法では解けないとする彼の姿勢が示されている。

2) ベルクソンの唯心論－唯物論の二項対立の克服と科学論

ベルクソンの哲学は唯心論だと言われたりするが、それは正しくない。現実的知覚は記憶や表象という内的な潜在的活動のために必要な情報を提供しており、精神世界だけを問題にしたのではない。彼は外的対象と無縁な形で人間の精神を論じないという意味では唯心論の立場ではない。それでは、彼は機械的な唯物論者かというところでもない。ベルクソンは人間精神を物質の現象と同じ脳という道具で説明したり、脳の物質的活動を分子レベルの集合体で説明するような絶対的な唯物論とは一線を画していた。人間の思考は、物理的なものの延長ではなく非物質的な原理によって構成されているとする。『ベルクソン講義録Ⅰ』の「形而上学講義」の第十五講・「魂 — 唯物論, 唯心論」, 第十六講・「自然についての様々な考え方 — 唯物論, 唯心論, 汎神論, 観念論」では、思考するという実体がそもそも存在すると考えることが人間理解の基本的視点だとしている。

(2) ピアジェのベルクソン・「生の哲学」への批判

ピアジェはベルクソンに対してどのような反応をしたのだろうか。ピアジェが自らの学問的生涯を振り返って書いた自叙伝的な『哲学の知恵と幻想』(1965)では、ベルクソンの研究を様々な視点から論じている。ピアジェはベルクソンの哲学に刺激を受け、また同時にそれに反発し、時には嫉妬をしながらベルクソンとは異なる認識論研究の道を進んだ。

ピアジェは『哲学の知恵と幻想』の第一章で、十五、六歳の時に叔父のサムエル・コルニエーがベルクソンの『創造的進化』(1907)を読ませ、ベルクソンの「生の飛躍」や「持続」、「直観」を取り上げ、人間の認識の問題を生物的進化でどこまで説明できるのかという難問に目を向けさせたと言う。ピアジェにとってはもう一人の重要な人物の影響があり、そこからベルクソンへの懐疑を始めるようになる。ピアジェの父親が勤めるニューシャテル大学の教授で、論理学者のアルノール・レイモンである。ピアジェが彼から聞いた講義はベルクソンの生命論に立脚した哲学ではなく、人間の認識の基礎にあるものを論理・数学的な発想で考えることへ拍車をかけていった。レイモンは記号論理学と数学によってベルクソンの生命論的発想を乗り越えていくべきだというもので、後のピアジェが取った発想と類似したものだった。ピアジェは生命の論理と、論理・数学的な論理とは別のものとして考える、一種、ベルクソン的な視点も抱えてはいたが、結局は、後者の論理的な知識構造によって前者の生命論的な解釈も置き換えることが可能になると考えるようになった。

ピアジェは一貫して、ベルクソンのような哲学的認識の研究では真理に到達することができず、実験と演繹による立証を通してはじめて真理の基準が満たされることになるという論を展開する。ピアジェが行った観察と実験による認識の形成と発達研究の理論的前提である。ピアジェはベルクソン、フッサール、そしてメルロ＝ポンティといった哲学的研究は哲学的反省をするだけで立証する道具がないと結論する。『哲学の知恵と幻想』の第一章の「わたしはなぜ哲学にすすまなかったか」にある彼の言葉である。「各人が立証し得る方法論的検証をもたないで事実の領域において何かを断定するのは、また論理計算的検証をもたないで形式的領域において何かを断定するのは一種の知的不誠実さである。」(邦訳 p. 19)。彼はここまで言い切っているが、ベルクソンと比べてフッサール、そしてメルロ＝ポンティに対しては比較的肯定的な立場を取っている。それは、後のところでみていくが、ピアジェはベルクソンの知能論を批判して、ベルクソンには対象世界と行為的に関わるという活動の視点がないとするもの

である。それに対して、フッサールの場合にはノエマとしての認識は外的対象に対する能動的関わりであるノエシスによって形成されるとするノエマーノエシス連関という外的世界と内的世界との円環、あるいは能動と受動的総合としての認識の生成を論じていたことを好意的に評価している。ピアジェには、ベルクソンが『物質と記憶』で、知覚と記憶との連関のように、あくまでも内的世界の中で認識の生成を論じていたと写ったのである。

ピアジェには実験的検証と論理的操作による分析を欠いた形で人間の認識を問題にすることはできないという一貫した姿勢がある。だから、『哲学の知恵と幻想』の第五章の「哲学と事実問題」では、哲学的反省だけに基づいた「揺るぎ得ない確信」は、結局は衰退していったと断言する。さらに、三年後の 1968 年に出された第二版の「再販へのあとがき」には、形而上学、特にベルクソンのそれを想定しているかのような文章がある。人間の問題として認識論の意味と生命的、実践的意味の二つの極があって、どちらか一方で他方を説明することはできないし、二つの意味を一元化してしまうこともできない。「知恵」は両者を調整することためには不可欠かもしれないが、これでは認識にも「真理」にさえも到達することなどできないというのである（邦訳 p. 261-262）。そしてこの「再販へのあとがき」の最後の部分で、彼は次のように言う。「哲学は、その反省的方法のおかげで、問題を提起するが、解決はしない。なぜなら、反省は、それだけでは、立証の道具を含んでいないからである。……実験し、演繹することを知っている偉大な哲学者たち（第二章参照）の科学をも科学と呼ぼうが、そのようなことはすべて何ら重要なことではない。本質的なことは、反省×演繹×実験の三位一体である。この三位一体の第一項は発見的機能を表し、他の二項は、『真理』を構成する唯一のものである認識的立証を表している。」（邦訳 p. 274）。

明らかにベルクソンを想定した「直観」では正しい認識へ導かれることはないとする。だからフッサールの場合には「直観」には、彼の初期の研究である『算術の哲学』（1891、フッサール全集第十二巻・所収）にみるように、対象に対して論理的操作によって認識論的分析を行うことがあったこと、そのことがピタゴラスの定理が生まれてくる一つのきっかけになったのである（もちろん、フッサールは『幾何学の起源』で言うように、ピタゴラスの定理が共有、伝播していくためには論理構造だけでなく、一種の知のコミュニティにおける相互的意味の共有が起源としてあったことを言う）。そこにピアジェはフッサールとは一部共感できるところがあり、ベルクソンにはこのような論理的操作という発想がないことを批判する。

だが、近年、ピアジェが考えるようなフッサールには論理的操作でもって対象を捉えることがあるのに対して、ベルクソンにはそれがないというのは当てはまらないことを示唆する論文がある。杉山は「フッサールとベルクソン ― 二つの『幾何学の起源』 ―」（2009）で、ベルクソンは『意識に直接与えられたものに関する試論』で、人は空間を把握する場合にもそれを幾何学的な計測によって捉え、また『創造的進化』の第三章でも、幾何学的な真理のアプリオリな理念性を持っていたと言う。

ベルクソンには空間を把握していくことで得られる帰納的な認識もそこに演繹的な能力が加わることで知性全体が形づくられていくという考えがあった（『創造的進化』、邦訳 pp. 275-276）ということなのである。ベルクソンの考えの中にはフッサールが『幾何学の起源』で指摘し、ピアジェが認識の形成には理論的な操作を必要としたことと同じ発想がそこにはあった。その意味では、杉山が言うように、フッサールとベルクソンとは論理的な認識分析の必要性を指摘していた。ピアジェはベルクソンの中にあるものを無視していたか、間違った解

積をしてしまったということだろう。

ちなみに、フッサールとベルクソンは同じ年の 1859 年に生まれている。二人の間に交流はなかったが、唯一、フッサールの下で学位論文を書いていたロマン・インガルテンを通してフッサールはベルクソンの「純粹持続」を知り、『創造的進化』にはフッサールの問題意識と近いことが論じられていることを知ったと言われている。インガルテンは、『フッサール書簡集 1915-1938』(1968)に収められている「エドムント・フッサールの思い出、および書簡への注釈」の中でこの間の事情を述べている(邦訳 p. 171-172)。インガルテンの学位論文のテーマは「H. ベルクソンにおける直観と知性」で、ベルクソンの『意識に直接与えられたものについての試論』も議論することになり、フッサールに根源的な時間構成的意識に関する質問をした。このことで、フッサールはベルクソンの「純粹持続」を知り、自分の考えに近いものだったが、またそれがフッサールの自身の『イデー』では十分に扱われていなかったことに気付いたということである。

ピアジェは認識の問題と人間の生の活動を論じる生命論とをあえて分けて、後者の論議の中心にあるものがベルクソンだとしている。ベルクソンは人間の問題として思考し、意識するという認識の問題を追究しながらも人間の現実の生を捕まえるためにはそれだけではないとして、人間の生の活動にある「持続」やその本質と意味を「直観」として捉えることこそが人間理解だとした。ベルクソン研究者の澤潟は『ベルクソンの科学論』(1979)で、ベルクソン哲学の中心にあるのは「生命論」であり、人間は持続の相の下にその存在があり、実在するということは「動き」であるとしたのがベルクソンの哲学的直観なのだとした。ベルクソンの哲学は別の側面から言えば科学思想、厳密にはフランスにおける「エピステモロジー」、科学的知識を論じる流れを作っている。特に、ベルクソンの生命論はまさに科学はどこまで人間の生命を論じることができるのかという問題、そして人間の生を科学としてどう問いを立てるべきなのかという科学的認識の問題でもあった。ここ数年の動きとして、ベルクソン哲学を科学思想として、「エピステモロジー」として読むことが行われている。「エピステモロジー」は英米の科学哲学とは幾分異にするものだが、このフランスにおける科学哲学である「エピステモロジー」の最大の特徴は、科学史の視点を科学哲学の研究に加えていることである。そこではこれまでの科学的認識の誤謬や発展の相対化を視野に入れた科学哲学を目指している。あるいは「エピステモロジー」のもう一つの特徴は、生命論の視点が入っているということである。

ピアジェが研究として目指したことは「発生的認識論」であり、それは当然のことながら生物的認識の問題も含めて人間の認識を総合的に論じようというもので、ピアジェの学問も「エピステモロジー」という思想圏に位置するものだった。金森(1994)はピアジェを単なる児童心理学の研究者と把握するのは大きな間違いで、彼の発生的認識論は該博な自然科学的知識や実証的データ収集に支えられた一種の実験哲学であると言う(p. 311)。あえてピアジェがベルクソンの思想、特に生命論を過剰なまでに批判にしたのは正しいことだったのだろうか。

(3) ヴィゴツキー：ベルクソンの心理学研究批判

これまで、ヴィゴツキーがベルクソンを批判していることを取り上げられることはほとんどなかった。ヴィゴツキーがベルクソンについて批判的に論じているところは複数の箇所がある、いずれも短い論評が多いからである(例外的に詳しく扱っているのが『情動の理論』の最終章・「ベルクソンと自然主義情動理論」であるが、ここでは取り上げない)。だが、ヴィゴツキーが

ベルクソンについて述べている内容からみると、ヴィゴツキーはベルクソンのいくつかの主要著書を詳細に読んでいる（『物質と記憶』は 1911 年にロシア語版が出ている）。ヴィゴツキーのベルクソン批判の主要なポイントは、ベルクソンの唯心論的発想であり、心身二元論である。ヴィゴツキーはベルクソンの問題点を的確に指摘しているところはあるものの、ベルクソンを明らかに誤解している部分がある。

1) 自然科学の手法を使うベルクソンへの批判

ヴィゴツキーがベルクソンについて最初に言及しているのは『心理学の危機』（1927）の「心理学の危機の歴史的意味」である。ベルクソンは『物質と記憶』では数学的手法をしばしば用いて人間心理を表現しているが、ヴィゴツキーは心理学では依然としてどのような形で人間心理を研究すべきかが確定していない状態の中で、ベルクソンのものは内容が伴わない形式的な議論になっていること、そして、自然科学の手法を使って心理学を研究することは時には研究を実現不可能なものにすると言う。例えば、10・「心理学の危機の意味」では、心理学の方法が十分に確立していない時に、ベルクソンのように数学的手法を使えばよいかというと、そうではないだろうと言う（「我々はベルクソンがそうしたのと同じようにケプラーやガリレオ、ニュートンが心理学であったらどういことが起きただろうかなどと問う必要はなくて、彼は依然として数学者であっただけだということである」、英語版著作集第 3 巻 p. 296）。次の 11・「心理学における経験論」でも、次のように言う。「パブロフやそしてこのベルクソンが自分たちの研究方法でもって心理学の体系を作り上げようとしている。心理学を自然科学の手法で研究する時に、経験論の立場に立つことが多いが、この場合の経験論は、体系立った方法論や構成原理に基づくものではなく、何でもありの折衷主義になっている。ベルクソン主義と称しているものも同じである。」（同上 p. 300）。

ベルクソンは哲学者であるが、彼は数学や生理学といった自然科学の研究を基礎にすえながら人間の意識や認識の問題を単なる形而上学的な物言いを超えて議論しようとした。ベルクソンの学問的姿勢は前にも述べたように、「実証的形而上学」の確立であった。それは心理学と同じものではない。

2) 机上の空論としての心理学批判

「心理学の危機の歴史的意味」の最後の結論部分である 16・「将来の科学としての心理学」で、ヴィゴツキーは、ベルクソンが「実証的形而上学」（邦訳では「経験的形而上学」）を心理学だと主張していることを取り上げている。ヴィゴツキーは、ベルクソンをはじめ当時のフッサールなどが「直観的心理学」と言ったりして、「〇〇心理学」と称したことは机上の空論で、心理学にただ新しい名前を付けているだけで、どのような心理学を目指そうとしているのか不明なままだと言う。ヴィゴツキーは、心理学が本来目指すべきものは、了解心理学やフッサール現象学、そしてベルクソンの研究などの哲学では得られないと考える。

ヴィゴツキーはベルクソンを含めて当時の心理学、あるいは哲学研究について、ビンスワンガーの『一般心理学の諸問題への入門（Einführung in die Probleme der allgemeinen Psychologie）』（1922）を参考にしているが、この著書だけに依存しないでベルクソンの『意識に直接与えられたものについての試論』、『物質と記憶』そして、『創造的進化』を直接読んでいたことが彼の発言内容から確認できる。例えば、ヴィゴツキーがベルクソンのように数学的手法を使って心理

学を論じることには批判的に論じているが、ベルクソンが好んで数学的記述を多用していたことなどはベルクソンを直接読まないと分からない。あるいは、「心理学の危機の歴史的意味」の16・「将来の科学としての心理学」でベルクソンが人間研究として取った基本的姿勢に「実証的形而上学」があったことを指摘している。ヴィゴツキーはこの「実証的形而上学」は心理学であるとしているが(邦訳 p. 334)、ベルクソンの「実証的形而上学」を心理学とするのは、ヴィゴツキーの誤解である。

それでは、ベルクソンは人間精神をあいまいな形にして議論をしたのだろうか。ベルクソンは人間精神の本質にあるものに「イマージュ」、「直観」、そして「持続」という活動を据える。これは彼の独自の形而上学である。そして、この人間精神の形而上学を実証的なものを支えにしながら議論展開を試みた。彼は、生理学的事実と心的世界にある表象のどちらでもない、いわば中間的な存在として「イマージュ」概念を提出している。ここで「イマージュ」を中間的な存在と言ったのは、対象と直接関わっている知覚でもなく、また記憶や表象、あるいは概念といった抽象的なものでもないということである。それは、物的対象から受ける知覚や表象に操作を加えていくことで形成されるものであり、その活動が「イマージュ」であり、人間の精神活動の基本形態である。イマージュは観念論という表象ではなく、また実在論の事物そのものでもなく、いわば事物と表象の中間に位置づけられるものである。ベルクソンの「イマージュ」と、心理学で使われる心的表象としての「イメージ」とは用語では同じだが、その意味内容は異なっている。彼の「イマージュ」概念は単一の心的実在を言ったものではなく、多様な活動を指していた。そして、前に述べたように、ベルクソンが『物質と記憶』で失語症を脳局在ではなく、複数の領野の機能的連関という考え方を出していた。この考え方は今日の脳研究では前提になっているものであるし、ヴィゴツキー、そしてルリヤも早くから人間の精神、そして脳の複数の活動の機能的連関として捉えていた。そこにはベルクソンとヴィゴツキーとの間の発想の一致をみることができる。

ベルクソンの主張でもう一つ大事なものは、「イマージュ」の成立を支えている「直観」の働きである。これは連合主義のように経験を寄せ集めることで何かが分かってくるといった機械的なものではなく、主体が本質的なものを一気に捉えたり、了解していくことで得られるものである。ベルクソンは、心理的事象というのは時間の中で持続する形で起きており、これに対して、物理的事象は空間の中に分割されているとする。だから物理的事象には時間的な延長や持続はない。彼にとって、心理学事象は時間的な持続を持っており、物理的事象のように一つひとつが関連を持つことなく単体で空間の中に置かれているものとは明確に区別されるものである。ベルクソンにとって、「直観」は持続という人間の根源的な活動が持っている意味を捉えることを可能にするものだった。

2. ベルクソンの本能と知能

(1) ベルクソンの本能論：「持続」を捉える「直観」

ベルクソンは、人間が他の動物とは異なる知的活動を可能にしているのは、対象の実在に直接到達する認識を本来的に持っているからであり、それが人間の進化を可能にしたとする。これが彼の「生の飛躍」で、この「創造的進化」を実現しているのが彼の「本能」の考えである。

ベルクソンは『創造的進化』で、生命的活動を営んでいる人間の本质にあるのは、現在から過

去へ、そしてさらに未来へとつながっている「持続」、つまり生きていることを捉えることであり、それを「直観」として感じ取ることとした。そして、この生命と持続に関わる認識に直接到達するものを人間は根源的に持っているという意味でそれを「本能」という言葉で表現した。ベルクソンは『創造的進化』の第二章では、この「本能」と区別して「知能」（この章では「知性」という表現を使っている）をあげているが、「知能」の方は、空間と無機物の対象をまさに分析的に捉えていく認識で、それは生命を捉えていくことはできないものとする。ここで注意をしておかなければならないのは、ベルクソンの言う「本能」は通常言われるようなものではないということである。それは生得的であることを必ずしも意味してはいない。

ベルクソンはこの『創造的進化』の第二章では、生命進化は決して計画通りに進んでいないこと、それは生命進化のことだけでなく、人間の成長、さらには意識の形成として二つの異なった活動があることを言う。そこでは本能こそがこの予定通りに事が進んでいないことに対して、克服できない限界を知り、なおそこに努力で乗り越えていこうとすることが成長を支えているものである。決まった計画の中で「知性（知能）」は外にまなざしを向けるだけで、与えられたものを再構成するにすぎない。知性は予測不可能なものを許さないのである（白水社版邦訳 p. 190）。

「本能」は生命というものの本質や有機的なものに従っており、生命としての活動を把握する。そして、そこで起きていることを捉えていくことが「直観」であり、「本能」の活動である。だから、「直観」は生命の内奥、そこで起きていることへとわれわれを導く（邦訳 p. 204）。

ベルクソンは『創造的進化』の中で、「本能」と言ってもよいものは人が生きていこうとする意欲や感性という自己の生を把握する力と結びついたものであるとする。この自己の生と活動を理解し、把握することは世界にこれまでの知識を当てはめたり、論理的に知っていくといった悟性や知性（知能）とは区別されるものである。

彼はこの章の終わりの部分で、認識論としてこれまで、知性と直観（あるいは知能と本能）の二つの能力の区別をあいまいにし、知性の方にばかり注目がいったしまった。だが、意識のレベルでは、物質に適合する知性だけでなく、生命の流れに従う直観も同時に考慮していくように二重の形式を持っていて、これが本来の姿だとする。このように、ベルクソンは人間の意識を認識という側面に限定することなく、生命活動に向けられていることで、その本質的な意味を見出すべきだとした。

（2）ピアジェのベルクソン知能論批判

ピアジェが主にベルクソンを批判しているのは彼の「直観」の概念である。ピアジェはベルクソンが時間的出来事やその持続を「直観」という認識方法で把握していくことを人間がはじめから持った理性であるかのようにしたことが問題だと言う。だからピアジェはベルクソンが直観を本能として論じ、本能と知能とを対比して扱ってしまったと批判する。ピアジェからすると、ベルクソンが生命組織と物質、本能と知能、時間と空間、内的生活と活動・言語との間の違いを強調し（『哲学の知恵と幻想』第三章、邦訳 p. 111）、前者にこそ意味があるとしているが、これら二つはアンチテーゼなのか疑問であるし、前者を中心に考えるから「直観」の発想が出てくると言う。

ベルクソンが知能は生命を理解するのには不向きで、それは空間と無機物の理解にしか使えないこと、さらにはこれらを理解する時にもあくまでも動きのない静止されたもの、不連続な

ものとしてある時だけに限定されているとしたが、ピアジェにすればそれは根拠が脆弱であると言う。そして、ベルクソンは知能を静止的なイメージの表象に還元して扱っているが、それは間違っており、本来のイメージというものは決して静止的なものでなくて対象に対して行為の形で関わっているものである。このようにピアジェは言う。ピアジェの知能とベルクソンの言う知能との違いが明確になっている部分である。ピアジェは、知能というものは本来「操作」という活動であり、知能は「力動的構造を創造する運動と生産的な構成」(同上邦訳 p. 120)を実現していくものなのである。これはまさにピアジェの知能の考え方そのものであり、彼は知能を均衡化という活動によって再構成されて、最終的には論理・数学的な操作による科学的認識を実現していくと主張する。だが、ベルクソンはピアジェが位置づけたような知能の考えではなく、あくまでも直観こそが人間認識の本質にあるものとした。このところがピアジェにとっては受け入れることができないものだった。ピアジェは次のように言う。「ベルクソンは、理性や科学的認識には還元不可能な、それ独特の形而上学的認識という彼の中心的テーゼを引き出すのである。それが、直観である。直観とは自分自身を意識する本能、すなわち意識の創造的仕事あるいは純粋持続である生命に固有な実在に直接到達する本能である。つねに実在のなかにいることを望むベルクソンは、生命的なものについてこの直観に到達する手段を提供する。」(邦訳 pp. 121-122)。そしてピアジェは「知的直観は大雑把な仮説である」(同上ページ)と断言する。

ベルクソンが人間の生命的なものを捉えていく本能の部分と、空間や物質の理解といった客観的な理解に属する知能とを区別することに拘ったことは、ピアジェは「生命と物質との対立、アンチテーゼを常に維持しようとしたことによると言う。ピアジェはこういう二元論の発想ではなく、そこには連続性が存在するという考え方を取らなければならないと主張して、ベルクソンを批判する(『哲学の知恵と幻想』・第三章・「超科学的認識の誤った理想」)。このようなベルクソンが固執した「生氣論」のようないわば誤った「超科学的認識」に対して、致命的な解答が出されているとピアジェは言う。それは近年になって登場してきているベルタランフィの「一般システム論」や「自己組織化」、「サイバネティックス」などでは物理的なものと生命的なものとの間の境界は無意味になってきているとする。ピアジェの発言である。「ここ数年来、人々は、機械論か生氣論か、偶然性か目的性かなどの古典的二者択一に直面することがなくなった。なぜならば、ベルタランフィの有機体説や、とりわけ、物理的なものと生命的なものとの間に中間に位置するサイバネティックスのような第三の型の考えが、今日では、現れており、厳密に因果的な次元のモデルによって、有機体に特殊な特性——一見目的論的な調節や均衡化——を説明できるからである。解決不能な二者択一に直面したときに、例によって例のごとく生じたこの第三の視点は、たしかに、ベルクソンのアンチテーゼによって致命的な解答である。」(邦訳 pp. 114-115)。このピアジェの指摘は、ベルクソンの言う生氣論も物理的な機械モデル、あるいはサイバネティックス的思考様式でもって説明できる可能性を示すものである。さらに、この問題は、ベルクソンの時間論にある心理的時間と物理的時間との対立ではない、もう一つの説明、あるいは調整を可能にするものとして、プリゴジンとスタンジェールが生命論を科学的な視点で説明できるという指摘、さらにはドゥルーズの独自の時間論とつながってくるものである。このことについては、後の時間をめぐる問題で議論をする。

ピアジェがベルクソンの考えに反発したもう一つの大きな理由は、認識の条件として活動を位置づけなかったことである。このことをピアジェは『哲学の知恵と幻想』の第四章で詳しく

論を展開している。ピアジェからすると、ベルクソンは人間の活動について述べてはいるが、これを認識形成の条件にはしなかった。だから、活動が認識の調整に与っていることを重視しなかった。ピアジェにしてみれば、活動による調整が内面化されていくことで論理の基礎を作っているのであって、活動の調整そのものには論理を含んでいるという。これはピアジェの認識理論の前提からの批判であった。ピアジェは言う。「彼（ベルクソン）は『予見的図式』の役割に気づき、それを光彩あふれる仕方で叙述した。しかし、彼はそこから活動のシエマの一般理論を引き出さなかった。だが、もしそうしていたなら、彼は、予見および成果の側面のみならず、まさしく調整の側面にも重点を置くようになったはずである。」（邦訳 p. 180）。

ベルクソンが認識における活動を軽視してしまったとピアジェが批判している具体的な例として、習慣記憶で「再認」が果たしている役割を十分に位置づけていないことがある。ベルクソンは「反復」に主体の意味構成の機能を位置づけていないからだと言う。ピアジェからすると、「再認」はまさに認識における主体の能動的な活動であるし、記憶の再構成と推論の活動がそこにはある（邦訳 p. 181-183）。ピアジェはインヘルダーとの共著『記憶と知能』（1968）では、ベルクソン、そしてフロイトは記憶を過去の経験をそのまま保持することを重視しているが、それは間違いであると言う。実際には記憶は主体が自分の持っている図式に同化したものを保存するという知能の図式化傾向にもとづいたものであって、それは形象的な組織化の一形式になっている（邦訳 p. 483）。そうすると、新しい問題に様々な形で適応していく知能の一側面という性格を記憶に与えていくべきだということになる。だが、このようにピアジェがベルクソンを批判していることはベルクソンの記憶についての解釈としては正しくない。ベルクソンは多くの著書で、記憶が決して「反復」や「習慣」といった記憶＝過去の枠の中だけでその機能を果たしているのではなくて、現在の活動と密接な関わりを作り出していくことを強調していた。例えば、『物質と記憶』の第三章には「過去と現在の関係」と題した節があり、ここで有名な「倒立した円錐形」を使いながら過去という記憶は絶えず現在という時限に流れ込んでおり、また現在という時限の時々のは行動は過去＝記憶へと送り返していくと言う。「物質」から「記憶」へと連続的に上昇し、かつ「記憶」から「物質」へと「下降」しながら「生きた行動」を展開している。金森（2003）の言葉を借りるならば「自分の過去の奴隷などではない」（p. 97）ということである。ピアジェは認識における活動の役割をベルクソンが軽視しているということを強調するあまりに言ってしまったのだろう。

このように、ピアジェのベルクソン批判を通してみることで逆にベルクソンの認識論にあるものを確認することができる。ピアジェが人間の科学的認識は形式的、論理的操作によって形成されるとしたことと、ベルクソンはあくまでも人間の生命的事実の把握こそが認識の本質にあるとしたこととの大きな違いである。両者の違いはあるものの、ピアジェの人間は論理的思考へと向かうという説明は、人間に理性として備わっているという一種の理性主義を取らざるを得なかったからである。

もちろん、ベルクソンにもピアジェが誤解をしてしまうことがあったのも事実である。ここでみたように、ベルクソンの「反復」に「機械的繰返し」のようなイメージを持ってしまうことがある。だから、ドゥルーズはベルクソンの思想を継承しながらも、『差異と反復』では、「反復」には新しいものが生まれてくるという創発的な側面があることを論じていたし、『意味の論理学』（1969）でも意味の生成を多重な活動の層を経て行われていることを強調していた。ドゥルーズは、いわば、ベルクソン論のより一層の精緻化、再構築を試みたのである。ここでみて

きたピアジェのベルクソン批判もドゥルーズによって解消されようとした。

(3) ヴィゴツキーのベルクソン本能論批判

ヴィゴツキーは「子どもの性格の動態に関する問題」(1928)で発達の源動力について議論をしている(「性格の発達の源動力は何か」)。表題は「性格の発達」だが、発達一般の問題を論じている。ここでベルクソンの『創造的進化』の中の「生の飛躍」を批判し、この考えでは人間にある内的なもの、発達の必然性だけが言われるだけで、発達へと駆り立てるものが何もない中でそれが実現するとなればそれは奇跡でしかないと反論する(英語版、第2巻、The dynamics of child character, p. 155)。大切なことは、発達の源動力として必然性とされているものに何がはめ込まれているのかを明らかにすることである。そして、ヴィゴツキーはこう言うべきだとする。「この問いに対する唯一の答えである：人間の生活にとって基本的、かつ決定的に必要なものは、歴史的、社会的環境の中で生活し、環境が求めていく要求に合うように生活体の機能を改造していくことが求められていくなかにある。人間の生活体というのは一定の社会的な単位(ユニット)でのみ存在しており、そこでのみ機能することができるのだ。」(同上 p. 155)。

この論文の結論部分で、ヴィゴツキーは、ベルクソンは問題を個人の次元へとすり替えてしまったと批判する。それ以外にもディルタイ、フッサール、そしてジェイムズ、さらにはマイノング、リップス」(同上ページ)といった哲学者、心理学者が同じようにいる。ヴィゴツキーはこれらの人々を次のように批判する。「現代心理学という名前がいかに危険であるか、そしてこの名前を誤らせて使うようにしたフランスの心理学者たちがいかに歴史的視点を持たずに振舞ったことか」と(「心理学の危機の歴史的意味」邦訳 p. 338)。

このような視点からみると、ベルクソン、あるいはその他の了解心理学、フッサール現象学にはヴィゴツキーの言う歴史・文化的視点が欠けていたことになる。ヴィゴツキーの未定稿の論文「人間の具体心理学」(1929)の冒頭で「重要 ベルクソン(チェルパーノフに対する論文集)」に続いて書かれているこの文章は、明らかにベルクソンを想定して書かれたものである。「知能の本質のなかにある。本能は有機体の道具を活用し、構築する能力である。」(邦訳 p. 263)。この部分は、メモの形で書かれていることもあり、詳しい記述になっていないので見落とされがちだが、ヴィゴツキーがベルクソンの本能と知能の区別を別な形で論じたものである。ベルクソンは、人間の知的活動(つまり「知能」)を動かしている源動力として「本能」を位置づけていたが、ここでヴィゴツキーはベルクソンの主張に大幅な改変を加える。知能の本質は自己の外にある道具の中にあること、そして本能は有機体の道具を活用し、構築する能力だと言うのである。この本能の捉え方は、ベルクソンの人間が内在的に持ったものとする考え方を大きく変えるものであった。ヴィゴツキーは、道具という社会・歴史的なものを手段として使い、知的活動を展開する能力こそが本当に人間の中にある本能、まさに「ホモ・ファール」だという訳である。ベルクソンの「本能」概念には欠けているという指摘である。ベルクソンを超えるべき視点をヴィゴツキーは提示したということだろうか。

(4) ピアジェのベルクソン批判：発達の観点の欠如

実は、ピアジェもヴィゴツキーと同じように、ベルクソン哲学には歴史的・発達の観点が欠如していたことを批判する。それは、ピアジェが認識の発生を発達の観点から論じていることからすると当然の批判だろう。彼の『哲学の知恵と幻想』の第三章・「超科学的認識の誤った理

想」では、現象学の欠陥として歴史的、発達の視点がなことを指摘する。「現象学の大きな欠陥は、歴史的・発達の観点をないがしろにすることである。……したがって、現象学は、絶対的なはじまりの原点——コギトに固有な視点——に身を置くので、難なく、おとなの現在の意識から出発して、深く掘り下げていき、時間・空間的水準の背後に、時間・空間の心理学がもはや何らかかわっていないような諸水準を、つまり、還元や括弧入れによって得られる諸水準を見出したのだった。」（邦訳 p. 132）。このように、あたかも大人で見出したことはそのまま子どもにもあてはまることが本質として存在するとしたということである。ピアジェは、子どもは操作期の段階になって大人の思考形式を示すし、その前の段階では子どもは形相的直観という、いわばベルクソンの直観と似たような活動をする場合もあるが、人間は発達の中では変化をしていくのであって、「直観」という言葉で人間の活動をまとめて説明してしまうようなことはできないと言う。もっともここでピアジェが言う子どもの直観とベルクソンの直観とは全く別のものである。要は、ピアジェが言いたいことは、直観に頼るのか、観察や実験という理論操作で認識活動をしているかで子どもの姿は違ったものになっていることを言いたいのである。ベルクソン、フッサールの哲学的直観は事実による検証ではなく、規範で説明してしまっている」と批判する。

ピアジェの場合は、歴史的観点がベルクソンには欠如していると指摘しているが、ヴィゴツキーのような文化・歴史的なものではなく、あくまでも個人の発達の变化が問題にされていないということである。もちろん、このようにピアジェが言ったとしても、まだ問題は残っている。たしかに子どもは発達の变化をするだろう。だが、もう少し大きな系統発生的な時間単位で人間の発達を考えた時、人とそれ以外の霊長類の間の決定的な違いはまさにベルクソンやフッサールが指摘しているように、人間の本質にあるものではないかということである。それはメルロ＝ポンティが「人間的秩序」と言い、人間は人間独自の「環世界」で生きているのである。もっと端的に言えば、チンパンジーは決して「ごっこ遊び」をしないのである。この問題は決して発達変化だけでは解決できない。

（5）ベルクソンとドゥルーズの「存在論的基礎」

ドゥルーズは 1957 年にベルクソンの複数の著書の重要部分を独自の視点で編集した『記憶と生』を書いている。その約十年後の 1968 年に彼の主著である『差異と反復』を出している。『差異と反復』は、ベルクソンの「持続」を「差異と反復」という新しい概念へと発展させたものである。ベルクソンにとって、人間の心理的事象や心理的活動の本質にあるものは生きて活動していることで、それは連続的な時間の流れ、つまり時間が途切れることなく続く「持続」という形でしか表せないものである。それを捉えるのがベルクソンの「本能」であった。この連続的な活動は単純な同じことの反復でもないし、絶えず変化をしていくものとして表れている。人が生きていくことの本質は、絶えず変化が起きている時間的な流れの中にある。

ドゥルーズはベルクソンのこの「持続」の考え方を『差異と反復』の中で継承する。つまり、「持続」していく人の活動とその時間経過では、決して同じことが繰り返していくようなものではなく、各瞬間では絶えず新しいものが生まれている。ドゥルーズが言う「反復」もベルクソンの言うように単純な反復ではなく、常にそこに新しいものが生まれながら展開されていくという意味での「反復」であり、あえて「反復」という表現を使うのは時間の連続を込めたいからである。そして、「反復」といつも一つのセットで捉えなければならないのは「差異」であり、

「反復」にはいつも「違い」＝「差異」を含んでいる。

このように、ドゥルーズはベルクソンの思想を継承しながらも、『差異と反復』では「反復」には新しいものが生まれてくるという創発的な側面があることを論じていたし、『意味の論理学』でも、意味の生成というベルクソンでは深く議論することがなかった側面についても、多重な活動の層との連続的な過程の中で起きていることに踏み込んでいった。

ドゥルーズはベルクソンの重要概念である「直観」を物質-知覚や記憶の世界からさらに言語の活動へと拡張していく。ソシール言語学の研究者で、ベルクソンとドゥルーズについての言及もある前田英樹が「言語の存在論的基礎について」(1994)で、ベルクソンの「存在論的基礎」を言語的活動にも当てはめて論じることをドゥルーズが試みたと言う。だから、ベルクソニズムから「言語の存在論的基礎」という問題を引き出してみせたのは、ドゥルーズ本人にほかならないと言う(p. 67)。ベルクソンの言う「存在論的基礎」とは、例えば過去のことを想い出していく(心理化)ことで現在の知覚や行動と結合させていくことを考えてみると、この過程の中で過去という存在へとまさに「一気に身を置く」ことを行っているということである。「存在論的飛躍」であり、これを可能にする「基礎」を人間は持っている。ベルクソンは『創造的進化』でこのように考えた。

ドゥルーズは『ベルクソンの哲学』の第三章・「潜在的共存としての記憶」では、ベルクソンは話された言葉を理解するのは、音や聴覚的映像をいちいち経由して意味を再構成するようなことをしないで意味の「ありか(存在)」へと「一気に」身を置く指摘していたと言う。ほぼ同様のことを『意味の論理学』の第五セリー・「意味」のところでも、次のように指摘をする。「私が何かを指示するとき、私は常に意味 [= 方向] がそこで既に把握されていると想定している。ベルクソンが言うように、音からイマージュへ、イマージュから音へと進むことはない、『一気に』意味の中に身を置くのである。」(邦訳 p. 62)。「言語の存在論的基礎」はドゥルーズの表現であって、ベルクソンの『物質と記憶』や『創造的進化』にはこの言葉は出てこない。

ドゥルーズは意味の生成を可能にする「言語の存在論的基礎」を人間が持っていて、これが出来事から直ちに「意味」を見出すことを可能にしていると言う。まさに、ベルクソンの「直観」を言語へ拡張する発想である。そして、ドゥルーズはベルクソンをここで超えようとする。ベルクソンの場合は、言語やその意味活動を記憶、つまり潜在的な持続の領域に留めて議論していた。記憶は身体あるいは現在の活動という現働化に起源を持ち、それを潜在化したものである以上、言語を記憶の一水準として捉えてしまうと、抽象化作用を基本とする言語の独自性を見出せなくなってしまうというのである。前田(1994)の表現を使えば活動する身体、食べることと話すこととの区別ができなくなってしまうのである(p. 58)。だから、前田は言葉と事物との区別をあいまいなまにした「潜在的混淆」に沈んでしまうとも言う(p. 59)。

ドゥルーズは物質的なものに由来することと、精神的なものとを同一視することはできないとすることを忘れなかった。だから、『差異と反復』でも、新しいものが生成されて、そこに一つの存在が生成されてくる場合でも、物質-身体的活動に基づく「物質的反復」と、言語的や概念化作用による「精神的反復」とは連続を持ちながらも区別されるべきと言う。『差異と反復』の第二章の文章である。「物質的反復と精神的反復という二つの反復のあいだには、大きな差異が存在する。前者は、それぞれが独立した継起的な諸瞬間あるいは諸要素の反復であり、後者は、共存する様々な水準における(全体)の反復である。物質的反復は裸の反復であり、精神的反復は着衣の反復である。前者は諸部分の反復であり、後者は全体の反復である。……前者

は現実的な反復であり、後者は潜在的な反復である。前者は水平の反復であり、後者は垂直の反復である。」（邦訳 p. 139）。ドゥルーズはベルクソンから思想的遺産を受け継ぎながら、そこから超えようとした。

3. 発達についての予定調和をめぐる議論

発達の基礎理論については、ピアジェとヴィゴツキーはいくつもの点で異なった考えを展開してきたことは承知の通りである。ここでは、主に発達をめぐるピアジェの予定調和論とヴィゴツキーの反・予定調和論をみていくが、ベルクソンもドゥルーズも共に反・予定調和の立場であった。

(1) ピアジェとヴィゴツキーの発達の基礎概念をめぐる対立

ヴィゴツキーがピアジェ批判を行っているのは、ピアジェが『児童の言語と思考』（1923）で、幼児期の子どもは遊びの中で他者とコミュニケーションができないと書いていることである。ピアジェはこの時期の子どもは自分の枠組の中で考え、物事を自分の視点からみていく「自己中心的思考」が優勢で、そこから幼児は会話でも互いに了解し合えることがない「自己中心的言語」になっているとした。ヴィゴツキーはその後、ピアジェのこの著書の 1932 年のロシア語版の解説を書く中で、幼児の「自己中心的言語」を批判している（この解説文は『思考と言語』の第二章に転載されている）。ヴィゴツキーは幼児でも仲間とのコミュニケーションは十分に取れて、決して社会性が欠如してはいないと反論する。そして、ヴィゴツキーはピアジェが見た幼児の言語の特徴は子どもが遊びの中で思考を展開していくために声に出しながら考えている時の言葉であると言う。いわば遊びの中で子どもが思考を展開する時に言葉を使い、その言葉が外言という形で表れている言語が思考の道具となって内言化される前の過渡期の現象だという訳である。

ピアジェとヴィゴツキーの間の論争は、単なる幼児期の言語の問題を論じたものだけでなく、二人の発達観の違いを表している。ピアジェの場合は、人間の発達には個人中心の世界から社会的な世界へと向かっていくとし、その移行は決まった思考の発達の順序に従うとした。人間は一定の方向に向かって発達していく存在で、それは予定調和的に進むとした。これに対して、ヴィゴツキーは、人間は発達の早い時期から社会的存在であり、社会・文化的なものの中に身を置いており、社会的なもの、ここではコミュニケーションという活動を行っていると考えた。そして、コミュニケーションという社会的活動としての言葉は次には自分の思考活動を支えるものへと変わっていく。

ヴィゴツキーは、人は社会的存在として外部の世界と変えずに接触し、関わっていく中で発達の実現していくと考えた。そこでは、当然のことながら外部の影響を受けながら成長変化する、つまり個人の内的な要因による予定調和で発達を描くことはできないとした。ヴィゴツキーは、『思考と言語』の第二章の結論では、ピアジェは発達の法則を一般化して論じてはいるが、実際は、人間は社会的環境やその他の要因を受けながら発達の姿は変わっており、あらかじめ決められた枠組で子どもの活動やその特徴を捉えることはできないと言う。彼は、どの文化の中にいる子どもにも当てはまるような、理想的、一般化してしまう「永遠の子ども」としてその姿をみることに反対した。「永遠の子ども（вечно детское, 英訳では eternal child）」ではなく、社

会・文化という人間が持っている歴史的なものに影響を受け、それに支えられながら発達していく「歴史的な子ども (исторически детское, 英訳では historical child)」としてみるべきなのである。ヴィゴツキーは、ゲーテの言葉を借りて「束の間の子ども (преходяще детское)」, 英訳では「変わりつつある子ども (transitory child)」とも言い、変化し続ける子どもの姿を明らかにしようとした(邦訳 p. 96, 英訳は p. 91)。

これまで私たちはともすると、子どもの発達の姿を予定調和的で、かつどこでもそれは普遍的な形で表れているものとして発達を考えがちであるが、この常識では発達の本当の姿を見失ってしまっているかもしれない。ヴィゴツキーは、子どもの発達は絶えず変わっていくこと、しかもそれは社会、文化の影響を受けながら絶えず変わりゆく子どもの現実の姿を取り戻すこと、これが発達研究の課題だとしたのである。

あるいは、ピアジェは人間の発達変化をいくつかの発達段階で区切り、数年間の思考の特徴として一括りで説明し、少なくとも二、三年間にわたるその時期の子どもの思考様式の一般的な特徴であるといういわゆる課題領域にわたって共通の反応がみられる「領域一般性」を想定した。だが、近年の認知研究では人の知識や解決の程度は課題の内容で異なっているという「領域特殊性」が言われおり、発達段階の発想が見直されている。

(2) ベルクソンの『創造的進化』の中の発達論

実は、ベルクソンもヴィゴツキーと同じように、人間の成長を予定調和として描くことはできないと主張している。彼は『創造的進化』で、人間の成長・変化を系統発生的な進化の時間軸の中でみていく論を展開しているが、ここでも今という時間の中で展開されている人間の活動とその発達の姿を予定調和としてみていくことはできないと考える。人は絶えず変化を遂げており、その変化は時には瞬間で起きることである。

『創造的進化』の第一章・「生命の進化について」では、われわれの人格は蓄積された経験を使いながら一瞬ごとに形づくられており、絶えず変化をしていると言う。そして、各瞬間は単に新しいだけでなく、予見不可能なものである。このようにベルクソンが言う背景には、彼が一貫して持っている思想がある。つまり、人が生きていることの本質は、絶えず変化が起きている時間的な流れがあり、それを生きている本人が「直観」として捉えるということである。彼は人の変化を単に経験したことを「足し算」のように積み上げられていくかのように考える「機械論」も、あらかじめ決められた設計図通りに事が進むような「目的論」も間違いだと言う。だからこの第一章の副題は「機械論と目的性」となっている。

『創造的進化』は人間の生命進化についての議論が中心であるが、後半では人間の成長・発達についても論が進んでいる。そこでは、人間発達の生成について検討することが主題で、彼が後半の第四章・「思考の映画のメカニズムと機械論的錯覚」で指摘していることは、発達をどのような視点で論じるべきかについて示唆を与えてくれる。そこでは、ヴィゴツキーの発達論とも重なるところが多い。

ベルクソンはこの第四章で、成長について次のように述べている(邦訳 p. 353)。私たちは「子供が大人になる」とは言わないで「子供から大人への生成がある」と言うべきなのである。「子供が大人になる」の「なる」には、人を「子供」の中に「大人」の状態があることを覆い隠すためのもので、そこでは子供は大人になっていく方向を予定調和的に持っていることを含んでおり、あたかも変わっていくことを「なる」という言葉でカモフラージュしているだけであ

る。実際には、生成していく活動、あるいは生成の過程そのものを主語としなければならない。だから、子供から大人に「なる」と表現してしまうのは、想像上の二つの発達の異なった時期が独立して別個にあることを意味してしまっている。だが、そうではなくて、「生成がある」とか、「移り行き」というように、動態としてみるべきなのである。ここに流動と変化こそが人間の実相であることを解いた生の哲学者ベルクソンの確信があざやかに語られている。このように指摘するのは、ベルクソン研究者であり、またドゥルーズがベルクソンを論じた二つの論文（「ベルクソンにおける差異の概念」、「ベルクソン 1859-1941」）の訳者でもある平井啓之である（p. 146-147）。ヴィゴツキーの言う「束の間の子ども」や「変わりつつある子ども」と、ベルクソンの「子供から大人への生成がある」と言う表現には、「変化しつづけていく」姿と、人間の活動とその発達を過程という時間の中でみていくべきだとする共通の問題意識がある。

ベルクソンはさらに、次のようにも言う。「状態でもって移行をこしらえあげられるつもりでいるかぎり、一切は闇であり矛盾である。（逆に）ひとが移行にそって動いてそこに思考によって横断面をつくりながら諸状態を区別するなら、ただちに闇は去り、矛盾は消える。」（『創造的進化』邦訳 p. 354。ここでは文章を変えている）。彼が「状態でもって移行をこしらえあげられるつもりでいる」と指摘しているのは、映画で時間変化を表すことができると思い込んでいることへの反論である。映画は一コマ、一コマの静止画を一定の間隔で映すことで時間変化を表現している。つまり、時間を物理対象の空間変化として客観的な分析ができるという発想である。ベルクソンは、映画表現は主体が持っている時間を捉えていないと言う。

ベルクソンが時間という変化の過程にあるものを客観的な事物の運動や空間移動で説明してしまうことはできないと強く批判をするのは、独自の時間論が背景にある。彼が分かり易くあげている例として、有名な砂糖が溶けていく時間がある。『創造的進化』の第一章のはじめに、一杯の砂糖水をこしらえようすると、砂糖が溶けるのを待たなければならないという有名な文章がある（邦訳 p. 27）。ベルクソンは、「この小さな事実が教えるところは大きい」と言い、その意味は、溶けるのが待っている時間は数学的な時間ではなくて、「早く溶けるのを待っている」一人ひとりの個人の中にある時間としか捉えられないものだからである。この時間は人が本質的に持っている「持続」の一部を表しており、「生きられる時間」だと言う（同上ページ）。時計で解けていく時間を計測し、あるいはその動きを映像として記録したとしても、そこで起きている変化には「私の待ちどおしさ」と、その中で経過している時間は何も含まれていない。だから『思想と動くもの』の緒論（第 1 部）でも、持続する意識である砂糖が溶けるまで待っている時間を映画フィルムで動かして、そこ展開されていく時間として表せると誤解してしまっていると警告をする（邦訳 p. 26）。このベルクソンが出した時間と空間をめぐる問題は、その後の論争になっており、ドゥルーズの大きな著書『シネマ』へとつながっている。それでは、映画という物理的な装置で出された映像を観て感じる時間と砂糖水になっていくことを待っている時間とは違うのだろうか。前者のような映画を観て感じる我々の中で起きている時間はたしかに他者の時間かもしれない。だが、それは個人が感じる主観的な時間、生きている中での持続とは重なることはないのか。こういう問題が残っている。ドゥルーズが『シネマ』で問題にしたことである。

（3）ドゥルーズ：生成・変化の一回性

ドゥルーズの哲学の基本にあるのは、「差異」の肯定、つまり違いと一回性を重視する発想で

ある。人間はもとより自然現象でも、同じことのくり返しでなく、そこから違いが生まれてくることがことの「本質」だとする。変化があるところ、動きがあるところではいつも新しいもの、「差異」が生成されている。ドゥルーズはこのように考えた。ドゥルーズは『差異と反復』で、人は一般化、抽象化された概念や思考装置であらゆることを説明してしまい、個別具体的な出来事から生まれてくる特異性を無視する傾向があると警告する。それは一般化、抽象化の暴力である。このあらかじめ我々が説明装置として持ってしまった概念＝「表象・再現前化」を使って差異を無視して同一化し、納得してしまうような発想は、出来事の中にある差異、つまり新しいものが生成されてくるという発生の現実を否定してしまうことになる。

『差異と反復』でドゥルーズは、出来事としての偶然性と、同じことが起きない一回性を「骰子一擲」という言葉で表現する。ゲームで振る「サイコロ」と、それに運命に身を任せる事態であり、偶然性の肯定である。「骰子振りの反復は、もはやひとつの同じ過程の頑強さに服従してはいず、ひとつの恒常的な規則の同一性も服従してはいない。」(第四章・「差異の理念的総合」邦訳 p. 300)。「偶然性の肯定」は一つの思想につながる。それは現実として存在していること、そこからものごとを考えようという思想である。ドゥルーズが「存在の一義性」とも言っているが、それはドゥルーズがスピノザから得たものである。ドゥルーズには二つのスピノザ論がある。『スピノザと表現の問題』(1968)と、『スピノザ ― 実践の哲学』(1981)であるが、特に前者はドゥルーズが独自の観点からスピノザ哲学を解釈したものである。ドゥルーズがスピノザから導き出したものは、個別そのものに存在性がある、それを理念や概念で説明してしまわないということである。個別の事象の多様性は平行する形で存在しており、そこには階層性はない。もちろん、スピノザをどう読むかということは難問で、ドゥルーズの『スピノザと表現の問題』も簡単に説明できるものではない。だが、あえてドゥルーズが言いたかったことをまとめると次のようなことである。人間というもの、その存在を表す、つまりそれを形あるものとして表現していくのは他との比較やそれから類推していくことではなく、個そのものをそこにある性質と能力を表しているものとみるということである。そのようにして捉えることで、個の存在自体の持っている意味(「存在の一義性」)が表れてくる。この「存在の一義性」、つまり、人間存在の特徴や性質をスピノザは神との比較や、神から授かったものとはしなかった。人間には、自己の様態を形にしていく力、実現していくものがある。ドゥルーズがスピノザの思想を「表現の問題」としたのはこういう意味からである。自己を作っていくのは自己の力、ドゥルーズの言う「ピュエサンス(力能)」である。ドゥルーズの「スピノザ論」からは、「骰子一擲」が持っている「偶然の必然性」を受けとめることであり、出来事には因果性も目的性もなく、また発生の確率を考えないという考えが導かれてくる。存在そのもの、個が持っている表現の力こそが原動力の本質としてある。

ドゥルーズとガタリ『千のプラトー』(1980)の第十章・「強度になること、動物になること、知覚しえぬものになること……」の「あるスピノザ主義者の思い出」という短い文をみてみよう。「その一」と「その二」あわせてわずか数ページだが、そこには彼のスピノザ論のエッセンスがある。スピノザが重視したのは一つの中にすべての現実性と多様性がある単位として事物、人を見ろということである。つまり、「一個の現実的無限を構成する無限小」であり、それは「完璧に個体化した一個の多様体」(邦訳 p. 293)である。この「一個の個体」は他とつながり、水平に広がりながら「アレンジメント」を平面上で構成していくものである。そして、こうも言う。「平面の統一性には事物の奥底に秘められた根拠の統一性などまったく無縁だし、神の

御心に宿る目的や企画もまったく無縁である。ここにあるのは、あらゆるものがその上に広げられる展開の平面である。」(同上ページ)。

ドゥルーズは「骰子一擲」で、単にことの偶然性、一回性だけを言っているのではない。個別なものは内部から、そして他との連結からつながりを持ち、触発し合う中で「アレンジメント」が編まれていく。これはドゥルーズの「リゾーム」と同じ意味である。彼は個別性を担保しながら同時にそこから水平的な連関を生んでいく例として子ども遊びの中で形態的に似たモノを結びつけていくことをあげているが、これは子どもたちはスピノザ主義者であるよい例だと言う(邦訳 p. 295)。子どもは遊びの中では長い棒を馬として使っていく。形が多少似たものであればそれを他の物として自由にアレンジして使っていく。そこには決まった使われ方などはない。そこで新しく意味づけられたものは別のアレンジメントが生まれるまで持続する。カッコ付きの無限の持続＝時間である。ドゥルーズが言う「現実的無限を構成する無限小」とはこういうことである。

あるいは、ドゥルーズはスピノザ主義とは、哲学者が子どもになることに他ならないとも言っているが、要するに、スピノザ主義は人間の本質を理解していくことを目指すということである。ドゥルーズが『差異と反復』の最後の章の結論として、出来事や事物が持っている一回性は単にその場限りのものではなく、そこには永遠の時間が含まれているとして、次のように言う。蝶番からはずれてしまった時間、つまりその時間に入り込み、これが最後という形で反復を止めさせ、一回しか反復を行わないが、そこにはことの本質が表われている。時間と出来事の一回性ではあるが、同時に永遠の時間、「永遠回帰」でもある(邦訳 p. 442)。この時間は「第三の時間」である。つまり、現在という「第一の時間」、純粹記憶である過去の「第二の時間」、そして永遠に未来へと続く「第三の時間」で、それは「永遠回帰」とも言われる。そこは、個別性を超えたもの、引き伸ばされた時間でありながら、そこでは、なお、個の特異性を含んでいる。特異性が凝縮されている。個々の特異性が共鳴し、反響し合って理念を形作っている。個の特異性同士が配置されているものこそが理念の本来のあるべき姿だとドゥルーズは言う。

ヴィゴツキーも、一つの事象を安易に概念や理念でもって説明してしまうことに強い危機感を持っていた。むしろ、個別なものは他のものとの間でつながりをもつ中で一つのシステム、機能的な連関が構成されていくと考えた。これが彼の「心理システム論」である。そして、このことを論じていく中で、ドゥルーズと同様にスピノザの考えを援用している。「スピノザの理論によれば、精神は、すべての状態が一つの目標に向かうようなことを達成できる。そこでは、一つの中心をもったそのようなシステム、人間の行動の最大限の集中が生じる。……人間は実際に個々の機能をシステムに取り込むだけでなく、システム全体のために一つの中心を創り出すこともできる。」(「心理システムについて」、1930、邦訳 p. 37)。

そして、この論文の最後では次のように述べて、締めくくっている。これまで自分自身の基本理念として持ってきたことは、人間精神にみるすべての現象はそれが一つの閉じられた機能内の変化で説明できるようなものではなく、むしろ個々の機能から生じる「結合の変化と無限に多様な運動の形態にある」ということである(同上ページ)。そして、人間精神の発達の問題に則して言えば、「一定の発達段階で新しい総合、新しい連結機能、それらの間の新しい結合形態が生じるという信念である。私たちは、システムとその運命に関心をもたねばならない。私には、システムとその運命、——これらの二つの言葉のなかに、私たちの差し迫った活動のアルファとオメガ(根源)があるように思われる。」(同上ページ)。

この最後の指摘が、ヴィゴツキーが発達を説明する時に重視した発達の小さな現象間の結びつきから発生が生まれてくるとする「微視的発生」の視点である。ドゥルーズとヴィゴツキーが共に確認しようとしたことは、人間の精神世界にある個別性とそれらの間の連関を創り出していく姿であった。

(4) ヴィゴツキーの微視的発生論

ヴィゴツキーは、個人の発達の中にあるより小さな時間変化に注目していくことで個人の発達過程に関わっているものが明らかになるという微視発生的な発想を取ったことと、個体発生のいわゆる個人の発達過程はあらかじめ決められた発達の予定表通りには進まないという主張する。ここからみえてくるのは、ヴィゴツキーの発達論は「反・予定調和論」である。

彼がこの微視的な視点で発生過程を論じているところでは一貫して、子どもの発達を促している外部からの働きかけや文化的道具の役割と常にセットにして、子どもの成長・発達にどのように機能しているかを議論しているのが大きな特徴である。まさに彼が取っている「子どもの文化的発達」の生成である。この「微視的な発生過程」の分析では置かれた環境の中で展開されている具体的な活動の様子を詳細にみていくことによって、個々の子どもが経験していくためには何を留意すべきなのかを明らかにしていくことができる。それはとりも直さず子どもが自己の発達を実現していくために可能なものを設定していくことであり、子どもの発達を促していく「発達の最近接領域」として求められているものである。ヴィゴツキー研究者のヴァルシナーら(2014)は次のように言う。子どもの発達を可能にしていくための条件、「発達の最近接領域」がどのようなものであるかということは、子どもが今の状況でどのような行動をしているか、その様子を微視的にみていくことがまずもって必要なことであり、この微視的発生分析が子どもの発達をうながす「発達の最近接領域」を設定していくことを可能にする(p. 154)。

ヴィゴツキーは子ども自身の活動の様子を詳細に分析し、また子どもの変化の過程をみていくことで成長と発達を可能にしていく環境と教育の条件を設定でき、また最終的には子どもも含めて人間が現実の生活の中で変化をしていくことの可能性とその条件を明らかにしようとした。人間は自分の周りにあって自分の成長を刺激し、支えてくれるモノや人との「出会い」と「接触」によって人は変わっていく。それは時には個人的な経験の中での出会いの中で起きることかもしれないし、特別な場面と状況や出来事から生じてくることでもある。ある意味では人間の変化は予定調和の形で起きないということでもある。時には偶然という時間が支配している。

ヴィゴツキーはピアジェに代表されるような人間発達をいくつかの発達段階で区切ったり、その発達の移行過程をどの時代、どの文化でも普遍的にみられるといった考え方を取らなかった。発達変化を段階で区切るという発想には、それぞれの発達段階で必要となっていると想定されたものを獲得し終え、安定した状態にあるから発達の特徴を示せるということがある。ヴィゴツキーは、実際の発達過程でみられることは、できることとできないことが相互に繰り返される不安定な状態を抱えていると言う。これが彼の言う発達の「危機」と「安定」という二つの相で、それぞれの発達の時期にはこの二つが交互に現れてくる。そして、発達としてまだ不十分で、安定していない「危機」の状態がより進んだ発達の状態へと進んでいく可能性を持っていると位置づける。ここで子どもは新しいものを形成していく。そして、子どもの発達の可能性

を引き出していく外的働きかけはこの「危機」の状態にある時にこそその役割が発揮される。未完成だから外からの働きかけが活きてくる。ヴィゴツキーが「教授・学習との関連における学齡児の知的発達ダイナミズム」（1933）で述べている言葉である。「発達の最近接領域は、まだ成熟していないが成熟中の過程にある機能、今はまだ萌芽状態にあるけれども明日には成熟するような機能を規定します。つまり、発達の果実でなくて、発達のつぼみ、発達の花とよびうるような機能、やっと成熟しつつある機能です。」（邦訳 p. 64）。彼は「発達の最近接領域」の働きをこのように言っている。ここからも分かるように、発達を完成された状態で区切るという発想では、変化しつつある過程を捉えることはできない。大切なのはこれから出来上がりつつある過程とその変化である。これがヴィゴツキーの発達に対する基本的な考えである。

できない状態からできる状態へと移行が起きているのが「発達の最近接領域」である。そこでは外からの適切な働きかけが不可欠ではあるが、ヴィゴツキーがここでもう一つ想定した重要なものに、子ども自身が自己の中に学んだこと、経験したことを自分のものにしていく内化の過程がある。ヴィゴツキーは晩年になって「発達の自己運動過程」という言い方で、子ども自身が発達を作っていく過程を重視している。彼はこのことを「子どもの発達の年齢的時期区分の問題」（1933）で、「発達とは、先行する段階では見られなかった新しいものが絶えず発生し形成される人格形成過程という最も強い特徴をもつ、不断の自己運動過程です。」（邦訳 p. 25）と言う。そして、これに続けて、「新形成物とは、ある段階で初めて出現し、子どもと環境との関係における子どもの意識、子どもの内的、外的生活、その段階におけるすべての発達過程をもっとも主要で基本的な点において規定するような、人格とその活動を構成する新しいタイプ、身体的・社会的変化として理解されなければなりません。」（同上ページ）とも述べ、子ども自身が新しいことを獲得していこうとする目標に向かって主体的に取り組んでいく活動こそが発達の原動力になっていることを強調する。ヴィゴツキーの「発達の自己運動論」の背景にはスピノザの「自己原因性」の思想がある。

4. 時間をめぐる問題

人間は絶えず運動し、思考を展開しており、時間という動く現実の中で生活をしている。ただ、やっかいなのは、この時間は一瞬の間に新しいものが現れ、そして消えていくという不可視なものである。そこで人間は時間を時計という文字盤の上で動く針の動きと変化に置き換えて、共通な時間として持とうとする。だが、これは本当の人間のリアルな時間ではないとベルクソンは言う。人間精神の中にある時間を問題にする時、時計や暦で表されている物理的時間の「クロノス・タイム」ではなく、人の生の営みの中で起きている心理的時間の「カイロス・タイム」を問題にしなければならないという訳である。

「カイロス・タイム」は人が生きて、活動している変化そのものを問題にすることである。それでは、生活の中で人はどのようにしてこの「時間」と変化を捉えているのだろうか。ベルクソンの時間論と、ドゥルーズが時間を運動と空間の中で論じた「シネマ論」を中心にみていく。時間を問うことは人の生と活動をリアルにみていくことである。

(1) ベルクソンの時間論、そしてピアジェの反発

ベルクソンは、人間心理を生活動としてみた時、それは時間的に連続し、「持続」している

とした。これが彼の時間論の背景にある考えである。人の時間は物理的事象のように、空間配置や運動変化のようにそれらを構成している単体に分解し、それらを寄せ集めることで表現されるものとは違うと考えた。そこに配置されたモノは「持続」していないからである。例えば、時計は、針の移動という運動として時間変化を表し、客観的な時刻表示をしているが、これは人の心理的な時間ではないというのがベルクソンの主張である。

もちろん、人は時間というものを客観的な形に置き換えて理解しようとするし、時間知覚の心理学でも、運動速度や移動距離として時間を知覚していると指摘してきた。あるいは時間知覚の発達で、フレッサやピアジェはある年齢の子どもたちは、空間を移動する運動そのもの、あるいはそれに費やしたエネルギーで時間の長短を理解するといった特徴をあげている(フレッサ, 1957『時間の心理学』)。これらは、時間を外側から眺めたもので、人の内部で流れている時間とその変化を言ったものではないとベルクソンは考える。

ベルクソンが言うように時間は全く空間における運動から得られるものではなく、内的な世界に限定したものなのだろうか。ここに時間を巡ってベルクソンとアインシュタインとの間で交わされた論争がある。アインシュタインはベルクソンの時間論を次のように批判する。アインシュタインの相対性理論では空間の歪みのによって時間は影響を受けており、時間には空間の変数が介在しているというものである。ベルクソンの時間論ではこのことを説明できないとする。

ピアジェは『哲学の知恵と幻想』で、ベルクソンはアインシュタインとの論争でアインシュタインの言う相対的時間を完全に論駁できず、「持続と同時性」の論文も彼の『全集』に収めることをしなかったと述べている(第五章・「哲学と事実問題」, 邦訳 p. 21)。ベルクソンとアインシュタインの論争の結果、哲学的反省だけに基づいた「確信」は、結局は衰退したと言うのである。あるいは、この本の日本語訳者の岸田と滝沢も「訳者あとがき」で、ピアジェの主張をそのまま受けとめて、アインシュタインの相対性理論に哲学的反省だけを武器にして論じたベルクソンはみじめにも敗れ去ったと言っている。だが、それは正しくない。もちろん、ベルクソンの「持続と同時性」は今日では読めるし、ベルクソンは時間論の議論を止めてしまった訳ではない。依然としてベルクソンの出した問題がその後も議論されているのは、プリゴジンらやミンコフスキーのものをみれば明らかである。ピアジェがベルクソンの時間論に否定的な論を書いているのは、ベルクソン哲学全体への反発があった。

ベルクソンは『物質と記憶』以降、「持続と同時性」(1922)という長文の論文で、アインシュタインに対して時間を客観的な方法、特に空間の移動でもって説明することはできるのかという疑問を出し、再び議論を始める。この論文には「アインシュタインの理論について」という副題が付いているように、アインシュタイン理論を詳細な数学的説明を加えて反論を展開しており、その内容は難解を極めている。ここでは、ベルクソンの論文を理解する範囲を超えているので、簡単に二人の論点の違いだけを確認しておく。例えば、双子の一方が地球にいて、もう一方の双子の方が光速に近い速度で宇宙船あるいは弾丸に乗って旅行する場合を考えてみよう。二人の時間はズレており、最終的に地球に戻ってきた時には年齢が違っているという事態である。あるいは、最近の研究では、アインシュタインの一般相対性理論が示しているように、時間の流れは重力の影響を受けており、地上と比べて高いところでは、時間は早く進むことが「光格子時計」で測定されている。しかし、この時間変化はきわめてわずかなもので、実際に人が現実を感じる時間とは別のものである。

これらをどう説明するかということである。ベルクソンは、時間は空間の変化で変わることはなく、それぞれの双子の間の時間はあくまでも相対的なもので、そこでは時間の実在を論じていない。この「思考実験」はあくまでもパズルに過ぎないものとした。ベルクソンにとっては双子の中で起きている時間を外から眺めて相対的に見ただけで、各人の時間の流れそのものを問題にしていけないという訳である。空間の歪みによって時間が変わるのではなく、二人の時間的な持続という流れそのものは何も変わっていない。ここで分かるように時間＝持続に対する捉え方がベルクソンとアインシュタインでは違っている。

プリゴジンとスタンジェールは『混沌からの秩序』（1984）でこのズレを問題にしており、両者は時間について別の説明をしていると言う。プリゴジンらはベルクソンの主張こそが時間の本質、つまり生きて動いている人間の時間の実在であるとしてベルクソンの考えを一部は支持をする。だが、ベルクソンが『創造的進化』で、生命は時間の中で進化し、存続するし、それは非可逆的な流れであること、そしてそれは持続でしか理解できず、そこでは科学は無力だと指摘していたことを受けて、それを科学の永遠の限界だとしてしまっただけとはいえないと言う。だから、運動に結びついた時間が、物理学における時間だけでなく、ベルクソンが問題にした生命論の分野にも当てはめて、説明することができることを指摘する。「ベルクソンが批判した限界は乗り越えられ始めている。それは、科学的アプローチや抽象的思考を放棄することによってではなく、古典力学の概念の限界を認識し、より一般的な状況で成り立つ新しい定式を発見することによってである。」（第三章・「二つの文化」の中の自然の哲学？——ヘーゲルとベルクソン、邦訳 p. 146）。彼らは、ベルクソンの主張は散逸構造としての非線形熱力学の中でも定式化できるとした。

ベルクソンの時間論を考えていく時に、参考にすべきもう一人の研究者がいる。精神病理学者のミンコフスキーである。彼にはベルクソンが『創造的進化』で人間の生を論じた思想を受けて書かれた『精神分裂病』（1953）もあるが、彼は『生きられる時間』（1968）で、ベルクソンの「持続」概念を背景にした時間論の正当性を言いながら、同時に、ベルクソンの考えには不十分なところがあると指摘もする。『生きられる時間』でミンコフスキーは、我々が日常で体験する時間には実は空間が結びついていると言う。ここで空間というのは、実際に自分が身を置いている場所で起きている出来事や経験であったり、ベルクソンが時計で表されるような、計測可能な空間の移動と同一視されるものである。ミンコフスキーは、時間と空間とは密接に結びついており、それらを時間変化として捉え、時間の中で生きているのが自分だと捉えていると言う。だから実際には空間—時間的なものとしてあることに気付かないままになっている。ある意味では我々は空間に縛られない自分の時間というものを持っているのも正しいことである。これがベルクソンの言う「生きている中での時間」ということである。健常者では時間と空間とは一体になっていて、区別できなくなっているのが現実である。ところが、精神疾患や幼児の場合には空間と時間とは密接に関わりがあることがみえてくる。幼児の場合として、ミンコフスキーは自分の子どもの例をあげている。筆者（ミンコフスキー）は自分の子どもを朝、学校に連れて行くのを日課にしており、朝食を摂った後、煙草を一本喫ってから家を出ていた。たまたま、普段よりも遅く起きてしまい、煙草を喫う時間がなかった。ところが、子どもの方はといえば、落ち着いてミルクを飲んでいて。そこで、「急がないと遅れる」よと、急かしたのだが、子どもは「大丈夫よ」言ったのである。子ども曰く、「僕たちは遅れるはずはないよ。だってパパはまだ煙草を喫っていないもの」。明らかに空間という出来事によって時間が支配

されてしまっているのである。逆に、老年痴呆症になって見当識障害を患った人では、出来事の時間順序が崩れてしまい、自分の主観的な時間だけで生きている。だから、自分の年齢や、今日が何日であるかも分からないことに加えて、自分が生活している施設には、死んでしまった母は毎日のように来ると言ったかとおもうと、昨日は来なかったと言ったりする。以上の二つは正しく時間を捉えることができない例であるが、ミンコフスキーはその他の精神病理学的症例をもとにしながら、実際は、我々は時間と空間を統合しながら自らの時間を作り、生きているという姿を描き出している。彼の『生きられる時間』は、ベルクソンの考えを基礎にした第一編・「生の時間的様相についての試論」と、第二編の「精神疾患の空間 — 時間的構造」の二つから成っており、特に後者からベルクソンでは明らかにされていない時間の中にある空間的なものを教えてくれる。ミンコフスキーは次のように言う。「空間と同一視された時間は、周知のごとく行き過ぎた静力学主義のために間違っている。しかし、反対に、行き過ぎた動力学(ディナミズム)によって誤つと思われるところの時間の心像(イマージュ)に対しても、それ以上にではなくとも、同じように警戒しなければならない。」(『生きられる時間・1』, 邦訳 p. 22)。後者は明らかにベルクソンの時間論のことである。実は、時間を空間—時間的なものとして論じていたのが、ドゥルーズの時間論であり、彼の『シネマ』である。

(2) ドゥルーズの『シネマ』における時間論

ベルクソンの時間論は心理的時間に拘ったものである。心理的時間は人間の生の中にある時間の本質であることは間違いないだろう。だが、われわれには具体的な身体運動や出来事を通して時間を感じていくという側面も同時にある。例えば、映画を見ながら、そこで流れている時間をいわば主観を離れて時間の流れを感じているという事実である。もちろん、ベルクソンは、映画は時間をフィルムの一コマ、一コマを空間的に移動させて表現しただけで、それは正しい時間ではないとしている。だが、われわれはここから時間を感じないのだろうか。ドゥルーズは時間を運動や空間の移動として論じながらベルクソンの時間論を超えようとした。

ドゥルーズの『シネマ』は『シネマ1・運動イメージ』(1983)と『シネマ2・時間イメージ』(1985)から成る大部なものである。ドゥルーズは『シネマ1』の序文で、この本は、映画史ではなく、映画に現れるイメージと記号の分類を試みたものだと言っている。だが、実際には戦前、戦後の膨大な映画を題材にしており、映画史に詳しくない者にとってはこの本を理解するのは難しい。もちろん、映画は当然のことながら動きを通して時間を表現しており、時間を論じるうえで格好の対象である。

ドゥルーズの『シネマ』の出発にあるのは、ベルクソンの時間論である。既に述べたように、ベルクソンは、映画で表現されている時間は、動きのない静止画を並べて、それを機械という映写機で写しているだけであるから、そこには時間はないとした。フィルムという物的なものを空間で移動しただけのものは、時間を空間に置き換えただけで、持続する時間ではないと強く批判したのだった。そこで、ドゥルーズは、ベルクソンが言うように、映画では本当に時間を表すことができないのか、そこで表現されている時間とはどういうものなのかを問い始める。

『シネマ1』でドゥルーズが問題にするのは、物体(ここでは映像)が運動をしている時には、たとえそれが一コマ、一コマは静止画であったとして、連続的に動かす場合には、スナップショットとは違って、それを観ている者には運動というイメージを与えているとした。この運動イメージは、映像を全体として変化し、持続していることを表現している(「運動は、持続に

おける、つまり全体における変化を表現する。』、『シネマ1』邦訳 p. 16)。ドゥルーズは、運動イメージという視点を入れることで、ベルクソンがあくまでも主体の内的時間に拘っていた限界を超えて、時間は運動によって従属して生じていることを示した。もちろん、我々が映画を観て、運動イメージを持った時にはこの運動を時間変化という視点で捉えるという活動が加わっていることは間違いない。だから映画という映像の知覚には、客観性と主観性の二つが同時に生じている。

『シネマ1』では、時間の表現に直接結びついている運動イメージが中心テーマであり、前半の第五章までは、運動と知覚の表現技法としてモンタージュについて多くを割いて論じている。撮影されたショットをつなぎながら観る者に全体性や連続性＝持続をもたらす編集法である。特に、エイゼンシュテインが断片的なフィルムを効果的につなげていくことでショットとショットの間から全体を意味づけていくことを追究し、これを特に「知的モンタージュ」とした。『シネマ1』でもドゥルーズはエイゼンシュテインの技法をしばしば取り上げて、人は運動の総体として時間を感じ、そこで広がっている時間は内的な意識の流れそのものとして持っていると言う。だから映画ではしばしば回想シーンとして時間を逆転させる「フラッシュバック」の技法を使うし、映像が止まったままにしながらそこに時間が流れているように感じさせる。このように、我々が持っている時間意識というのは、ベルクソンのような一方向だけで流れるものではなく、逆にたどっていくようなことで全体の時間を作っている。エイゼンシュテインの映画論を体系的に論じている大石が『エイゼンシュテイン・メソッド』（2015）で、エイゼンシュテインが映像を通してそれを観る者の内部に変革を起こすことこそが映画の本質であるとして、そこに内化の過程を想定していた。このエイゼンシュテインの考えはヴィゴツキーの内化の概念を借りたものであった。このことは後でみていく。

ドゥルーズの『シネマ1』では、運動イメージという時間に関わるだけでなく、顔の映像表現から得られる感情イメージ、情動反応による欲動イメージも具体的な映画作品と映像技術から扱っているが、ドゥルーズの言う「イメージ」はベルクソンの「イマージュ」と同じものである。既に確認しておいたように、ドゥルーズの「イメージ」、そしてベルクソンの「イマージュ」は、知覚や表象に操作を加えていくことで形成され、対象の全体性を把握するもので、具体性を備えた図式や枠組に近いものである。だからドゥルーズは運動イメージだけでなく、感情イメージ、欲動イメージといった個別具体的なものを言う。それは、観念論的な表象でも、また実在論の事物そのものでもなくて、いわば事物と表象の中間の性質を持ったものである。

ドゥルーズのシネマ論で重視しなければならないのは、『シネマ2』になると『シネマ1』で中心的に扱われてきた運動イメージから時間イメージへと移行していったことである。時間イメージは時間そのものを与えてくれるものとして位置づけ、それはベルクソンが強調した時間の世界であるが、ドゥルーズはベルクソンのように時間そのものの生成を言うのではなく、運動イメージから時間イメージへと移行してくるとした。ここが重要なところである。ドゥルーズは映画を例にしながら人は具体的な出来事や他者との関わり、それらの経験から自己の時間を生成しているのであって、ベルクソンのような自己の主体的な活動だけを特化したものとは一線を画している。時間イメージは空間化されたものでも、運動から派生してきたものではない時間を与える。それは、運動イメージと結びついている日常の具体的な経験や出来事を超えたものであり、ドゥルーズの言う結晶イメージと時間の結晶である。そして、この時間イメージをもたらすのは、運動イメージに特化したエイゼンシュテインの映画表現ではなく、それと

は別の発想で作られた映画である。だからドゥルーズは『シネマ 2』の第一章を「運動イメージを超えて」というタイトルにして、そこでは日本の小津安二郎の作品のいくつかを取り上げ、日常何の変哲もない、まるで時間が止まっているかのような静かな映像を通して観客は時間を感じ、自己の時間の本質へと向かわせいくと言うのである。

ドゥルーズはあくまでも映画を切り口にして人の時間生成の基本にあることを運動イメージで論じ、微視的なものの生成が基礎になっていることを言い、そして運動イメージと時間イメージへの接続と、そこからさらに別の時間の世界へと進んでいくことを論じた。人の時間の本質というものを描き出そうとした。

(3) ヴィゴツキーとエイゼンシュテイン：映像的思考と内化

ドゥルーズは『シネマ 1』の運動イメージでは、エイゼンシュテインの「知的モンターージュ」といった各種の映像表現によって観客に運動イメージを惹起させ、そこから映画を通して出来事の持続という時間を生み出していくと論じている。ドゥルーズが運動イメージを通して時間という持続を生み出して過程を映画から描き出そうとした時に、映像という具体的な表現媒体が運動イメージの形成に直接与っているという発想であり、エイゼンシュテインの「内的モノログ」に近い考え方であった。

エイゼンシュテインが「内的モノログ」を映画に使ったのは、ヴィゴツキーの「内言」と「内化」の考えによるものである。エイゼンシュテインはヴィゴツキーの著作を熱心に読んでいたことはよく知られている。彼らの研究交流の様子と、エイゼンシュテインがヴィゴツキーの思想に触発を受けていたことは、佐藤が『ヴィゴツキーの思想世界』(2015)の第四章・「ヴィゴツキーとエイゼンシュテイン」でふれているし、大石が『エイゼンシュテイン・メソッド』(2015)の第一章・「фонд 1923」の「エイゼンシュテイン・メソッド」でも詳しく紹介している(注:「フォンド 1923」はエイゼンシュテインのアーカイブの名称で、「フォンド」は「ストック」という意味である)。大平(2005)も「エイゼンシュテインとヴィゴツキー」でもエイゼンシュテインはヴィゴツキーから影響を受けていたことをエイゼンシュテインの著作内容から指摘している。

エイゼンシュテインの「内的モノログ」は、人が映像的思考を形成し、展開していく時に映画の具体的な視覚情報が人間の内部へと移行し、それが視覚イメージ、あるいは運動イメージを直接作っていく過程を想定している。映像という外に表現された動きに呼応して観客が思考の流れを作っていくということである。これはヴィゴツキーの内言の考えと一見すると似てはいるが、その意味するところは違っている。ヴィゴツキーは『思考と言語』の最終章・「思想と言葉」で、人が自分の言葉として内言を使っていく中で独自の意味を再構成していくことを強調していたことを忘れてはならない。ヴィゴツキーは、何度も内言は自分の内的世界の中で独自の言語的意味を再構成していくものであって、「内言はまったく特別の、自主的・自律的な独自の言語機能」(邦訳 p. 422)なのだという。あるいは次のようにも言う。「内言では、単語は先行、および後続の単語の意味を自分自身のなかに吸収し、ほとんど無限に、自分の意味を拡大する。内言では単語は外言におけるよりもはるかに多くの意味を積みこんでいる。」(邦訳 p. 419)。ヴィゴツキーは人間は外部にあったものを単に自己の内部へと「移行させている(transmit)」のではなく、「改変していく(transform)」ことが本質的な活動なのとした。だから、「内言はその心理学的本性において独特な形成物」(邦訳 p. 379)なのである。

このように、ヴィゴツキーは言葉の問題として内言の意味論を展開したが、エイゼンシュテインの場合は、内言を観客の心的変化をもたらしていくような映像提示といった意味で使い、「内的モノログ」や「知的モンタージュ」の形式としている。だから、エイゼンシュテインは、ヴィゴツキーが内言を個人の内的世界での意味の再構成としたようなものではなく、映像による提示で映像的思考を直接導いていくことに力点を置いてしまった。エイゼンシュテインは内言の具体的な映像手法としての「内的モノログ」を「どうぞ！」(1930)と「映画形式」(1935)では視覚的イメージを伴ったものとか、感覚的でイメージ的な思考を持ったものとしているが、本来の内言よりも映像的なイメージの意味合いを強くしている。そして、モンタージュという映像の小さな単位であるショット間の衝突や断絶が内的世界における映像的思考、つまり「内的モノログ」をもたらしていくものとしたのである。ヴィゴツキーが言語的活動としての内言を考えたことをエイゼンシュテインは映像や感覚的思考に変えてしまった。彼は、映像の構成と表現が直接、観客のイメージや感覚的思考、さらには情動までも導き、形成していくという映画形式の絶対的な力へと進んでしまった。明らかにヴィゴツキーの内言の世界での再創造の活動は軽視されている。このようなエイゼンシュテインの内言解釈には問題がある（大平，2005）。ドゥルーズも『シネマ2』の第七章・「思考と映画」でもエイゼンシュテインの「映画形式」を問題にしている。彼はエイゼンシュテインが言うモンタージュ法として映像ショットが与える衝撃について、下手をすると人の思考内容を強制するようなプロパガンダ映画になりかねないと言う。

ドゥルーズは『シネマ2』の時間イメージになると、エイゼンシュテインの映画論を大きく取りあげなくなる。『シネマ2』では、運動と視覚イメージといった感覚運動的脈絡に依存することなく、人間の内的世界で流れている時間そのものを問題にし始める。それは、内的思考の展開であり、その持続の過程である。これはヴィゴツキーの内言による思考活動と同じである。一度はエイゼンシュテインによって歪んだ形で解釈され、用いられたヴィゴツキーの「内言」を元に戻すことを可能にしてくれるものである。だからドゥルーズは『シネマ1』ではエイゼンシュテインのモンタージュ論などを取り上げて、運動イメージの生成を論じながら、『シネマ2』になると、こういった形でエイゼンシュテインを論じることはなくなり、エイゼンシュテインの映画技法の問題点を指摘するようになる。

ドゥルーズは『シネマ2』では、感覚運動的な映像情報による行動イメージではなく、映画が持っている純粋な光学的音声的状况を重視するようになる。むしろ、ここから観客は映画を通して自分の中にある時間を感じ、再創造していくようになると言う。それは、内言を通した内的思考の展開である。以下は、ドゥルーズの発言である。「何も起きない時間という問題を最初から投げかけ、映画の進行につれてそれを増殖させることになる。」（邦訳 p. 18）。時には何気なく置かれたモノは雄弁に語ってくる。「小津の静物は持続し、十秒間の壺として持続をそなえている。この壺の持続はまさに、変化する状態の継起を通じてとどまるものの表象である。」（邦訳 pp. 22-23）。

ドゥルーズは『シネマ2』の第一章・「運動イメージを超えて」では、小津安二郎がカメラアングルを人が座っている時に見えるような角度で水平に撮り、そこから見える室内に置かれた何気ない品物、赤い急須や赤いキャップの醤油差の瓶、そして主の居なくなった部屋に置かれたミシンを使う時の小さな椅子をクローズアップして映し出された場面を挿入する（「秋刀魚の味」）。小津の作品ではしばしば時間が止まっているような印象を持ってしまうが、この止

まっている時間の中で大きな時間が起きている。

ドゥルーズはこうも言う。「純粋に光学的音声的状况は、行動にまで延長されることもなければ、行動によって導かれることもない。……それは行動イメージにおける感覚運動的図式からいつもわれわれが抽出することができるような神経的攻撃としての野蛮や、粗野な暴力ではない。」(邦訳 p. 24)。運動イメージを喚起する動きを中心とした映像ではなく、事物を表現した光学的な映像、そして音声は直に人の内部へと向かっていき、人の感情を動かす。だから、「純粋に光学的で音声的な状況(描写)は現働的なイメージであるが、それは運動へと延長されるのではなく、潜在的なイメージと連鎖し、これとともに一つの回路を形成する」(邦訳 p. 65)ということである。運動や空間から離れた時間そのものの形成である。もはや、ドゥルーズが『シネマ 2』で述べていることは、単なる時間の問題を超えた、人間の内的精神世界の生成そのものである。

文 献

- ベルクソン, H. 1889 意識に直接与えられたものについての試論 — 時間と自由 — 合田正人・平井靖史・訳 2002 筑摩書房 (ちくま学芸文庫).
- ベルクソン, H. 1896 物質と記憶 田島節夫・訳 1965 白水社/合田正人・松本 力・訳 2007 筑摩書房 (ちくま学芸文庫).
- ベルクソン, H. 1907 創造的進化 松浪信三郎・高橋充昭・訳 1966 白水社/合田正人・松井 久・訳 2010 筑摩書房 (ちくま学芸文庫).
- ベルクソン, H. 1922 持続と同時性 — アインシュタインの理論について — 鈴木力衛他・訳 2001 ベルクソン全集 3・所収 白水社 155-399.
- ベルクソン, H. 1934 思想と動くもの 河野与一・訳 1998 岩波書店 (岩波文庫).
- ベルクソン, H. 1990 ベルクソン講義録 I 合田正人・谷口博史・訳 1999 法政大学出版局.
- Binswanger, L. 1922 *Einführung in die Probleme der allgemeinen Psychologie*. Berlin: J. Springer.
- ドゥルーズ, G. 1956 ベルクソンにおける差異の概念(邦訳名: 差異について) 平井啓之・訳 2000 平井啓之・訳・解題 差異について 青土社 7-125.
- ドゥルーズ, G. 1956 ベルクソン 1859-1941 平井啓之・訳 2000 平井啓之・解題 差異について 青土社 170-196.
- ドゥルーズ, G. 1957 記憶と生(ベルクソン・著, ドゥルーズ・編) 前田英樹・訳 1999 未知谷.
- ドゥルーズ, G. 1966 ベルクソンの哲学 宇波 彰・訳 1974 法政大学出版局.
- ドゥルーズ, G. 1968 差異と反復 財津 理・訳 1992 河出書房新社.
- ドゥルーズ, G. 1968 スピノザと表現の問題 工藤喜作他・訳 1991 法政大学出版局.
- ドゥルーズ, G. 1969 意味の論理学 岡田 弘・宇波 彰・訳 1987 法政大学出版局/小泉義之・訳 2007 河出書房新社 (河出文庫).
- ドゥルーズ, G. & ガタリ, F. 1980 千のプラトー 宇野邦一他・訳 1994 河出書房新社.
- ドゥルーズ, G. 1981 スピノザ — 実践の哲学 — 鈴木雅大・訳 1994 平凡社/2002 平凡社 (平凡社ライブラリー).
- ドゥルーズ, G. 1983 シネマ 1 * 運動イメージ 財津 理・齋藤 範・訳 2008 法政大学出版局.
- ドゥルーズ, G. 1985 シネマ 2 * 時間イメージ 宇野邦一他・訳 2006 法政大学出版局.
- エイゼンシュテイン, S. M. 1930 どうぞ! 浦 雅春・訳 1986 岩本憲児・編 エイゼンシュテイン解説・所収 フィルムアート社 136-163.
- エイゼンシュテイン, S. M. 1935 映画形式 — イメージの冒険 桑野 隆・訳 1986 岩本憲児・編 エイゼンシュテイン解説・所収 フィルムアート社 164-215.
- フレッヌス, R. 1957 時間の心理学 — その生物学・生理学 — 原吉雄・佐藤幸治・訳 1960 創元社.
- グイエ, H. 1990 前置き 合田正人・谷口博史・訳 1999 ベルクソン講義録 I・所収 法政大学出版局

ix - xviii.

- 平井靖史・藤田尚志・我孫子信・編 2016 ベルクソン『物質と記憶』を解剖する 書肆心水。
- Husserl, E. 1891 *Philosophie der Arithmetik: mit ergänzenden Texten (1890-1901)* (Husserliana: Bd. 12), Den Haag: M. Nijhoff. 5-283.
- インガルデン, R. 1968 「エドムント・フッサールの思い出」および書簡への注釈 桑野耕三・佐藤真理人・訳 1982 フッサール, E. & インガルデン, R. フッサール書簡集 1915-1938: フッサールからインガルデンへ・所収 せりか書房 159-299.
- 金森 修 1994 フランス科学認識論の系譜 — カンギレム, ダゴニエ, フーコー — 勁草書房。
- 金森 修 2003 ベルクソン — 人は過去の奴隷なのだろうか — NHK 出版。
- 前田英樹 1994 「言語の存在論的基礎」について 宇野邦一・編 ドゥルーズ横断・所収 河出書房新社 51-70.
- ミンコフスキー, E. 1953 精神分裂病 — 分裂性性格及び精神分裂病者の精神病理学 (新版) 1954 村上 仁・訳 みすず書房。
- ミンコフスキー, E. 1968 生きられる時間 I — 現象学的・精神病理学的研究 中江育生・清水誠・訳 1972 みすず書房。
- 澤瀉久敬 1979 ベルクソンの科学論 中央公論社 (中公文庫)。
- 大石雅彦 2015 エイゼンシュテイン・メソッド — イメージの工学 — 平凡社。
- 大平陽一 2005 エイゼンシュテインとヴィゴツキー アゴラ: 天理大学地域文化研究センター紀要 第 3 号, 55-77.
- ピアジェ, J. 1923 児童の言語と思考 (邦訳名・児童の自己中心性) 大伴 茂・訳 1954 同文書院。
- ピアジェ, J. 1965 哲学の知恵と幻想 岸田 秀・滝沢武久・訳 1971 みすず書房。
- ピアジェ, J. & インヘルダー, B. 1968 記憶と知能 岸田 秀・久米 博・訳 1972 国土社。
- ブリゴジン, I. & スタンジェール, I. 1984 渾沌からの秩序 伏見康治・伏見 譲・松枝秀明・訳 1987 みすず書房。
- 佐藤公治 2015 ヴィゴツキーの思想世界 新曜社。
- 杉山直樹 2009 フッサールとベルクソン — 二つの「幾何学の起源」— 哲学会・編 哲学雑誌第 124 巻, 28-44.
- Valsiner, J. & Veer R. 2014 Encountering the border. In Anton Yasnitsky at al. (eds.) *The Cambridge handbook of cultural-historical psychology*. Cambridge: Cambridge University Press. 148-173.
- ヴィゴツキー, L. S. 1927 心理学の危機の歴史的意味 柴田義松・藤本卓・森岡修一・訳 1987 心理学の危機 — 歴史的意味と方法論の研究 — 所収 93-288. 明治図書。
- Vygotsky, L.S. 1927 The historical meaning of the crisis in psychology: a methodological investigation. Translated and with an introduction by R. van der Veer 1997 In R.W. Rieber & J.Wollock (eds.) *The collected works of L.S. Vygotsky vol.3*. New York: Plenum Press. 233-345.
- Vygotsky, L.S. 1928 The dynamics of child character. Translated and with an introduction by R. J.E. Knox & C.B. Stevens 1993 In R.W. Rieber & A.S. Carton (eds.) *The collected works of L.S. Vygotsky vol.2*. New York: Plenum Press. 153-163.
- ヴィゴツキー, L. S. 1929 人間の具体心理学 土井捷三他・訳 2012 土井捷三・神谷栄司・監訳「人格発達」の理論 — 子どもの具体心理学 — 所収 三学出版 262-284.
- ヴィゴツキー, L. S. 1930 心理システムについて 柴田義松・宮坂琇子・訳 2008 ヴィゴツキー心理学論集・所収 学文社 9-37.
- ヴィゴツキー, L. S. 1930-31 文化的・歴史的・精神発達理論 柴田義松・監訳 2005 学文社。
- ヴィゴツキー, L. S. 1931-33 情動の理論 神谷栄司他・訳 2006 三学出版。
- ヴィゴツキー, L. S. 1933 子どもの発達の年齢的時期区分の問題 神谷栄司・伊藤美和子・訳 2012 土井捷三・神谷栄司・監訳「人格発達」の理論 — 子どもの具体心理学 — 所収 三学出版 10-42.
- ヴィゴツキー, L. S. 1933 教授・学習との関連における学齢児の知的発達のダイナミズム 土井捷三・神谷栄司・訳 2003 「発達の最近接領域」の理論・所収 三学出版 49-51.
- ヴィゴツキー, L. S. 1934 思考と言語 柴田義松・訳 2001 新読書社。
- Vygotsky, L.S. 1934 Thought and word. Translated and with an introduction by N. Minick 1987 In R.W. Rieber & A.S. Carton (eds.) *The collected works of L.S. Vygotsky vol.1*. New York: Plenum Press. 243-285.